

松井先生の御退官に当つて

浅井辰郎

松井勇先生にはこの3月、めでたく満65才の停年退官をなされる。永い精緻なご研究と教育の実績により功成り名遂げられた今、若輩が加うべき何物もないわけではあるが、ご一緒したこの6年間に、或るときは童顔そのもので大いに笑われ、あるときは青筋を立てられたこともあったので、今となっては別れの辛さは小さくない。そしてぜひ送別の辞をお贈りしたいと切実に思う。

私の印象の第1は後輩に対して厳しい教育が間々あったことである。とくに民間を勝手に歩いて来た私の行動が、あとの教室に禍してはと思われてか私には中々厳しいものであった。

例えば入試問題の作成や校正は実に緻密そのもので、長い時間と繰返しての批判、タテ・ヨコ・上・下からの検討を加えられて、全教官に範を示された。またよい講義の準備のために日曜や早朝に登校されるという噂は、実際に拝見した。又私自身に対しては、整理するためアジアの大縮尺図を多数持込んだときに、「大学に私物を置いてはいけません。これは法律で禁じられていますから・・・」と教えられ、卒業生から戴いたボケの鉢植が北向の部屋では春になっても中々芽を出さないで、植物用蛍光灯を夜も点灯しておく旨の貼紙を守衛用に出したところ、「火事にでもなったら大変だから、ご遠慮下さい」と注意を戴いた。この慎重で細心を純情は渡辺光先生が退官され、先生が教室主任になられてその全責任を負われてからは一層躍如たるものがあった。しかしこれは吾々がこれから守って行くべき大切な心得であると私は信じている。

この際、私はこれと全く正反対な先生の温かさ、あるいはもうお茶大関係者はとうにご存じかも知れない先生の温かさをぜひ披露したいと思う。私事に亘って恐縮だが父浅井治平は大正10年頃府立5中に奉職し、ここで松井先生や故吉村信吉、秋田大学長渡辺武男氏らのお相手をしたのであった。そのご縁から私が地理をやり出した昭和10年代以後、たまに学会などで松井先生にお会いすると、先生はつつかつと私の所に来られて、まるで私が父でもあるかのように直立不動で「お父様はお元気ですか——」とお尋ね下さったものである。私がお茶大に勤めて最初にご挨拶に上ったときもたしかそれであった。さらにこの3～4年父の入院中に、思いがけなく好物の菓子などを再度お送り下さったことがあり、一家は恐縮している次第である。

この先生の温かい純情は、4年居ればどの学生にもよく通じていることとは思うが、ここに歴史的事実を掲げて、先生のお徳の一端をお示しするわけである。

先生、どうか悠々自適、一層のご加養とご研鑽の程を祈ってやみません。